

団長の心のものさし

第35回音楽会
その真意に迫る

なぜ、今さら「祈り」なのか

ことしは前半戦にオペラ等の大きな本番を多数こなしたが、中盤戦ではほとんどステージがない。昨年末に開催予定で延期になっていた音楽会も、当初の7月から9月に再延期となったからだ。比較的余裕？で活動している。とりあえず取り組んでおこうと、11月の「あるも」との合同曲である「ジプシー」「コタン」の大曲2曲も一段落。音取り段階は終わった。新しいメンバーも多数(?)入団したので、再度、音楽会の練習に突入することになる。



思いが詰まった第35回音楽会のチラシ

自画自賛だが、今回の選曲は深い！特に古今東西、ジャンルを問わない、いわゆるタブーとされるプログラム構成だ。作品の住み分けは、作品そのものがするわけではなく、私たち演奏者が勝手に割り振っているのだと思う。人種差別と同じだ。僕はこの部分に異常に反応する習性がある(笑)。

もともと自分自身がポピュラー音楽から音楽に興味を持ったからかもしれない。表現方法も合唱のような地味なスタイルではなく、バンドという「キャーキャー！」と騒がれる表現方法からスタートした。根底を流れる意識そのものがポップなのだ。古臭い体質も一考の余地があると感じているし、今ではクラシックと呼ばれるものも、当時のポップスだからだ。このポップ感がないと生きた音楽を感じないのである。だから雅楽の「越天楽」も僕にとっては最高にポップなのである。

祈りにジャンルはない

なんとか分け隔てなくプログラムを構成できないものか…長年の僕の課題であったとも思える。

そんな時、ちょうどたおに35周年という機会に、これまでの集大成、記念碑的な音楽会を開催したいと考えた。そのテーマが「祈り」だ。元々、歌そのものが祈りだと考えているから、あえてタイトルにすることもないのだが…。しかし、何気なく歌ってしまっている歌にも、それぞれの「祈り」が込められている。作曲家、詩人たちのクリエイターとしての使命感も手伝っているのだろう。そこに新しいだの古いだの、クラシックだのポップスだの、日本だの外国だの、そんなことは全く無意味な区別なのである。

演奏家は音楽の娼婦

あの有名なチェリスト、ピアニスト、指揮者のロストロポーヴィチのドキュメンタリー映画「人生の祭典」の中で彼が語っている。「演奏家は音楽の娼婦だ」と。過激な表現だが、彼だからこそ、その表現も深みを増す。この言葉に強烈な共感を覚えた。まったくその通りだ。演奏家は相手を選ばない。誰とだってお手合わせが出来る。その貪欲さが、作品に対する深い洞察と、「自分のエゴによる分け隔て」のない愛情を注ぎ込むことが出来るのだと思う。そうすると作品は、必ずぐーっと自分に近づいてくる。駄作はない。駄作のままにはしてはいけないのだろう。結果、駄作はなくなる。この世に命を与えられた人が、その条件や環境、背景によって差別などされてはいけないことと同じだ。それぞれに必ず輝きがあるのだ。

演奏家には作品を選ぶ自由がある。聴衆にも選ぶ自由はある。だが、聴衆の自由度は演奏家によって決まる。演奏家が偏らず、多くの作品を提示すれば、聴衆の選択肢は格段に広がるのである。演奏家の自由は、時として偏見を与える結果になりかねないことは、常に頭の片隅に留めておかなければならない、大事な意識だと考えている。

多くを知っているほうがいい。多くを感じる力を備えたほうがいい。この世に存在する「様々」を、音楽を通じてならたくさん触れること、感じる事が出来るのだから…。

うたおにの5月13日(木)の様子

練習内容

「Mass From Two Worlds」より

Gloria

「Zigeunerlieder」より

Einst ein Kusschen gab

Der Tanz

Leding bleiben Sunde war!

Mond verhüllt sein Augesicht

合唱祭の演奏曲も決まり、とりあえず試演は終わり…。一旦、あるもとの合同曲も終わらせ、熟成期間に突入。9月の音楽会の練習再開に入るため、ブラームスの手付かずの4曲を一気にさらった。凄いペースだと自分ながら思う。それだけたくさん作品に出会えるということ。早く「ものにする」力が付いた。これが第一期の目標だった。次は…。